

# 小田の流れ橋／北畑橋



小田川は井原線小田駅のすぐ南側を流れている。そこにかかる観音橋の下の中州で毎年8月花火があげられる。その中州にわたるために川の中に飛び石が置かれているが、渡れそうもない。途中で落ちてしまいそうだ。かつて人はこの川をどうわたったのだろうか。





その下流500mほどのところに北畑橋と呼ばれる橋がある。コンクリの橋桁を15ばかり建て、その上に細長い板を10列ほど並べて繋げただけの木橋。簡単にできるが川が増水すれば流されてしまうので流れ橋とも呼ばれる。今時何故こんな橋が残っているのかと思うが、この一帯にはかつて小田川の渡しが有ったとのことで、その後継と思えば納得できる。





小田側沿いの幅の広い堤防の上をゆっくり歩きながら流れ橋に近づくと、橋のたもとにいた白鷺たちが一斉に舞い上がった。遠くに高圧線が見えるが、それが無ければ遠い昔と変わらぬ眺めだ。



流れ橋には手すりなどは何も無い。人が歩ける幅と言う機能があるだけだ。ところがそれが細々と大河を横切ることによって不思議な美しさと強さを見せる。



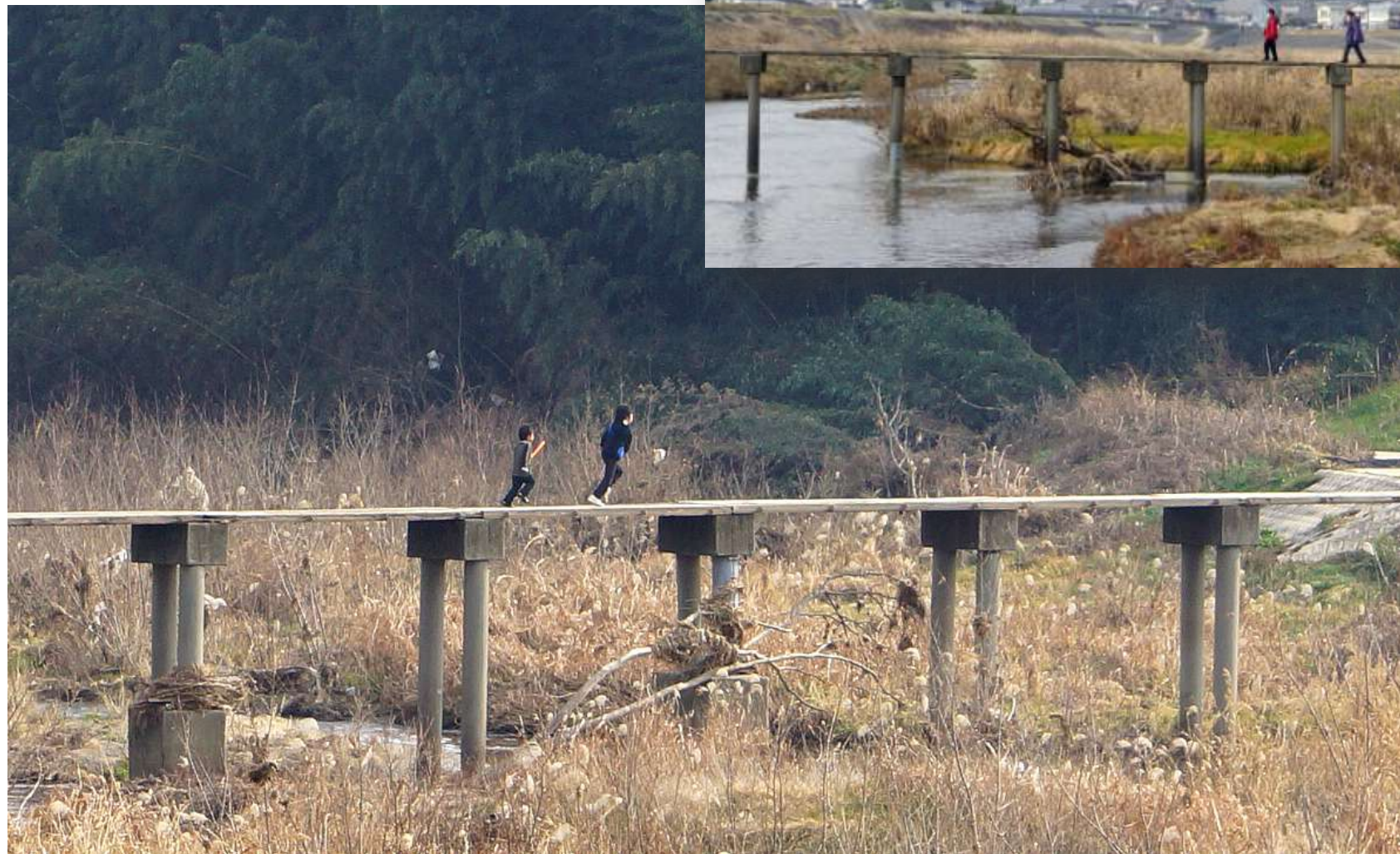




小田川は荒れると手がつけられない。  
橋の周囲にはその痕跡が残っている。



子供たちにとってはこの橋ほど楽しく、  
刺激的な走路は無いだろう。寒風の中を一  
散に走り出した。大人たちはおそるおそる  
わたり始めた。







何を思うか踏みしめ踏みしめ長い流れ橋を渡る。



小田の渡しについては幕末期の歌人平賀元義の歌があり、橋のたもとにその案内板がある。

岡山藩を脱藩、備中、備後一帯を放浪していた40歳の歌人の目にこの川は茫々としていかにも大きな川と見えたのだろう。意を決して渡った力みが伝わってくる。同人にはこんなつやっぽい歌もある。

花守は心許しついで吾妹上枝の梅をここに手折らむ

小田の渡し跡  
古への村をたけをか渡りけん  
小田の渡りを找めたりつ  
天保11年平賀元義詠  
北川の昔を訪ねる会





ここで小田川を西から東へわたると井原から矢掛に入ることになる。  
左が観音山（151m）、右が神戸山（153m）だ。